

# 1 国語

\*\*\* 開始の合図があるまで、開いてはいけません \*\*\*

試験が始まるまで、下の〔注意すること〕を読んでおいてください。

〔注意すること〕

- 問題用紙のページは12ページまでです。 解答用紙が1枚あります。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 試験時間は、50分です。
- 印刷の見えにくい場合やページがぬけている場合は知らせてください。  
そのほかの場合は、質問を受けません。
- 必要なものは、えんぴつ、消しゴム です。

※問いに字数制限がある場合は、句読点等も一字に数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ながいつながりだった。それが、死んで、断れて、私だけがのこった。**A** した、へんな気持ちだった。

順ならば親がさきへ死ぬのはあたりまえな筈だけれど、そこんころがどうもすつと来なかった。どうしてははの方がさきへ死んだんだろう、なぜ私があとへのこったんだろう。昔つからきつい人で、なんでも私のかなう段じやなかったものを、なんのわけでこんなに脆く折れてしまったんだか、なんとなく信じがたく腑に落ちかねた。一ツには数年来離れた土地に暮して会う折もなくいたせいもあるうけれど、死別のかなしみには実感が来ず、遠い感じばかりがしていた。それはなにかに似ている感じだった。よく知っている感じでいて、なかなか思いつかず、日かづが過ぎてから、ああ雪だなどわかった。雪が突然ざざと廂をすべり落ちた、あれによく似ていた。

身のまわりのものがそつちの家から私の手もとへ移されて来た。

① 血につながる子でなく、縁につながる母だったから、どちらにもそれ相応のしあわせがあった。怨恨だり憎んだりした、それだけなら易しかろう。怨み憎みのひまひまに愛情もまざるとなつて、さて人と人とのあいだはむずかしい。ははにも私にも本来似ている性格があったし、なんにしても長年育てたり育てられたりしていれば、たがいにあくの強いところには惹き惹かれて似ても来るらしく、したがってよくわかりあい底いあいました。が、はははおとなの潜めた執念ぶかさ

をもつて対していたし、私は若さの\*<sub>1</sub> やりてんぼうを振りかぶつていたし、絶えず相似から来る葛藤、乖離から生じる親愛がくりかえされてい、むしろ他人ならうまく行つたかと考えられる組みあわせだった。しかし、ははと子の不和反感は奥深い観念から発生するように見えて、じつは愚にもつかない日常の雑事・感情からはじまって堆積していた。だから、かつて毎日見なれ、今またしばらくぶりで見るとははの世帯道具は、どれにもこれにも古い傷を語るし、みが再現のなまなましさを見せていた。筆筒がでくんとしていれば、不機嫌で食事もせずにはすわり通していたははの強情さを思いだし、鏡がきらつとすれば、起つて行き際にちらりと捨て眼を置いて行く癖をおもう。かと思えば、ばか大きいメリヤスの足袋が出て来て、それには神経痛を苦しがつて三枚もこんな足袋を重ねていた気の毒さがよみがえる。白髪染で黒く染つた櫛の歯を見れば、あれほど自慢だった髪の毛の美しさもうかんで来るといふものだった。親子というもの、生活というもの、その根強さ、ずぶとさが古い道具類に浸み透っていた。なまじいに古傷をまさぐられるような苦々しさは濃く、死の哀感はかえって薄く、

② がらくた片づけはいやなしごとだった。

赤い針さしが残っていた。むろん手製の、\*<sub>2</sub> たどうのような形がちよつとばかり風変わりな出来だった。ははは手芸も器用にしたが、どういうものか日本風の針箱を用いない人で、いつもこの携帯用みたいな針さしをつかっていた。赤い針さしはいつの間にか置き場処のないままに私の粗末な裁縫用具と同居していたが、私には私の潔癖が

あつたし、家人もこれを使うともなく使わぬともなく、\*<sub>3</sub> あたら針さしはごろつちやらしながら、経つに早く、もう四年がたつていた。

「かあさま、ちよつと来て見てよ。これ見て頂戴よ。」声になにか本気な響があつて、私は洗濯を捨てた。ちよつとも早く見せたいために、すわつた縁側から襖ふすまのほうへ向けてさし出した娘の手さきに撮つままれて、えたいの知れないものが、射きしこむ冬の陽を切りかえしてきりきりとしていた。

「なあに、それ——」

見ると、いやなものだった。毛ともいえず針ともいえないものだった。無尽に絡みあつた毛のかたまりから、毬いがのように針が突き出た。Bそこへすわり、見つめた。

「これをね、も少し小さくこしらえ直そうとおもつてほだいたんだけど、こんななんですもの、あんまり気味がわるくて——どうしようかと思つちやつて。」

なるほど、ほだいた赤いきれがあたりに散つていた。ゆるしを乞うような娘のまなざしが私を見た。

「こうすると泣くみたいなの。」へらで押えられると、かたまりはかすかにきしんで音をたてた。ぞわぞわとこちらの毛あなもきしみみそうなのを娘の手前かくすつもりで、両手にもみあげを押えてこらえると、こわばりが筋肉を伝つて這はつた。

「何年になるのかしら、この針さし。」

私はだまつていた。三十余年、そう四十年に近いだろうか、ははが人には後妻と呼ばれて私にはままははになつて嫁入つて来たときから、私はその針さしをかわいいと知つていたのだ。折れた針、曲つた針、木綿針、絹針、\*<sub>4</sub> 蒲団ふとんとじ、\*<sub>5</sub> メリケン針、これほどどつさ

りのものを呑のみんでいながら、上つ面は赤いきれを著きてかわいげにいた針さし——だが。

③これ、あたしが片づけけるから玉子はもうおよし。」見のこして、娘は次へ起つて行つた。

毒針のように用心してかかっているくせに、指は心の動きの猛々しさにひっかかつて、たびたびちくつとした。何度ちくつとしてもやめずに、一本一本抜いて行つた。抜いても抜いても、かたまりはなおしんに固くしこつていた。からだのしんにぶすつと刺さつて私にままつ子の針一本が、たしかに顫ふるえていた。伏兵のようにつんと出て来たり、しぶしぶ押し出されて来たり、毛は針に嚙かまれ、針は毛に畳まれているらしく、はてしなく思われた。

やりかけの洗濯もなにも忘れていた。完全に毛だけになつたかと思ふかたまりを、ゆつくりと、しかし大胆に、握つたり放したりして試み、私は満足だった。なごんだ気もちが、さらにその毛だまをも緩く解きひろげる作業をそそのかした。ややあつて緩みはじめた。そのときになつてはじめて、それがははの抜け毛ではないかと気づいた。しずまつた胸にまた思いがのぼる。ひつぽると毛は抵抗を感じさせ、のち強靱きやうじんにぶつと断れ、つづいて二本三本、長くひきぬけて来た。

ははの髪は自慢に値する髪だった。量、長さ、色、沢つや、申し分なくていながら、皮肉なことに持主の意に逆らう髪だった。あまりに多くあまりに強過ぎて、ははの望む優しい髪がたには結いあがらないのだつた。ふけ落し、白髪ぬき、その後は白髪染と、深ふかけて行く齡としとともに何度私は手伝わされただろう。はははその度にじれて\*<sub>6</sub> 癩かたを起したし、私も途方にくれて腹を立てた。

一本一本力余つて緩い反そりを打つてねじれているのが特徴だった。よ

く確かめようとし、陽かげはもう膝を移っているのを、ほっと知った。抜け毛に齢はないものだろうか。からだを離れて三十年の余も押しかがめられていたとは信じられない髪だった。多少の軽い癖がついてはいるものの、いま頭から脱れて来たものとしてもさしつかえなかった。これが何万何千本みごとに揃って\*7 黄楊の櫛にすかれ、束ねる手から余ってこぼれた触感が、量感がおもい出される。

おやと思う。それが動いたようだった。風か？ 熟視し、それはほんとうに動いたのだった。陽に光りながら、ちようど癖になった個処で、ごく僅かに浮いて反るものようだった。かたまりの中からほかのを引きぬいて、ちようどそこにあつた白い包み紙の上に置いてためすと、毛はやつぱり陽を吸うと夢のようにふわつと動き、若い女の伸びをするすがたが咄嗟に聯想された。火鉢のそばとか筆筒の隅とか——窮屈にころりとして——ほんの一寸睡りだけが深く寐入つて——ふつと醒めて——本能的に頭だけを擡げて——見まわして——ずずつと背なかで摺つて畳を漕ぐ——幾分胸や腰が浮いて、爪さきから指までの線がぎゅつと張る——び、び、び、と快さが走る——力が落ちて胸のカーヴが元のやわらかい平安にしずまる、そんな姿をまどわせて毛のかがまりは伸びをした。

若かつたのははの寝姿、夏などよく簾の蔭で寐入つていたその姿、竹に雀の模様のゆかたを著ていたつけ。

そのははは、**C** 畳に手をつけて、むこう向きに起きあがつた。髪に手をやって、にこつとこちらへ振り向いた。機嫌のいい時にする、おどけた笑顔でこちらを見ている。

「よかつたわあたし、もうままははじゃないもの。」そう云った。いえ、そう聞えたようだった。いいえ、それも違う、私がそう云わせた

んです。でも、声はほんとうに天から降つて来た、ほんとうに。

白いカーディガンの玉子が、ちいさいガラスのあき壇に、その夥しい針を詰めて、匂いのある油をさしている。「埋めるにしても流すにしてもねえ——」

冬の陽のなかに私はからだばかりをぬくぬくといて、**④** げそつと気もちが削ぎ落されていた。

「この毛、どうしましょう。」

「そうねえ」と濁して、私はいつも自分たちの始末する通りに、風呂の火の盛んなときにくべようときめていた。燃えさかる火には威厳があるものだった。威厳のもとに人知れず委ねて、無に送りかえしたかった。そしてそうした。針はいまだにそのまま私の針箱に入れてある。

ははは「ままはは」という縛られから、にこつと笑つて、はつきり脱けて行つたにちがいない。私もとうに、「ままつ子」から解き放されていた筈だった。おもえは長いような、また短いようなつながりだった。死なれたのちの親子のつながりというものは、生前にくらべて、おそらく較べものにならないほどの遥けさになお続くのだろう。

(幸田文「髪」による)

〈注〉

\*1 やりてんぼう……「やりたい放題」の意か。

\*2 たとうのような形……「たとう」は畳紙、着物や帯をしまう時に包む和紙をさす。ここでは、針さしが詰め物をたとうのように包んでいることを表しているか。

\*3 あたら……惜しくも。

\*4 蒲団とじ……蒲団の端を縫い合わせて閉じるときに使用する

る、太くて長くて丈夫な針。

\*5 メリケン針：洋裁用の針。

\*6 癩かん：癩癩かんしやく。不満から、感情を爆発させること。

\*7 黄楊わうげ：ツゲ科の常緑低木。木目が細かく、彫刻や細工の素材として使われる。

問一 本文中の空欄A、B、Cにあてはまるものとして、最も適切な

ものを次のア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア くるつと イ こつそりと ウ すぼんと

エ のろのろと オ はつきりと

問二 — 線部①「血につながる子でなく、縁につながる母だった」

とあるが、二人はどのような関係だったのか。それを説明した部分  
を本文から三十字で探し、はじめと終わりの五字ずつを抜き出して  
答えなさい。

問三 — 線部②「がらくた片づけはいやなしごとだった」とあるが、

それはなぜか。次の空欄X・Yに入る語句を、それぞれ指定された  
字数で本文から抜き出して答えなさい。

X (八字以上十字以内) が Y (二字) している古い道具類に  
触れるから。

問四 — 線部③「これ、あたしが片づけるから」とあるが、「私」

が針さしを手を取っているときのようなすを説明したものとして最  
も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 娘の玉子が見せた毛のかたまりは、三十数年前に自分のはは  
からもらったものであり、赤いきれで包んであったかわいい針  
さしが娘によって台無しにされたことにショックを受け、いら  
だっている。

イ かわいい針さしの中身は無数の針を呑みこんだ気味の悪い毛  
髪のかたまりであり、外面ばかりとりつくるって意地が悪かつ  
たははに受けた仕打ちの数々を思い出して募る憎しみを止めら  
れないでいる。

ウ 自分の心の真ん中にははへの苦々しい思いがなまなましく存  
在し続けていることを自覚し、おだやかでいられない心が指の  
動きに伝わって、何度も針で指を刺してしまっている。

エ 針さしの中の毛髪がははのものである可能性に気づいて髪  
の世話を手伝った思い出が感覚を伴ってよみがえり、その髪を針  
さしにするために集めていたははの姿をいじらしく思ってい  
る。

問五 — 線部④「げそつと気もちが削ぎ落されていた」とあるが、

このときの「私」はどのようなようすか。その説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のなかに詰まっていたものが消えて虚脱している。
- イ 白昼夢にありありと現れたははにうんざりしている。
- ウ 何でも自分に尋ねる娘の気の利かなさにながかりしている。
- エ 気の進まないことをやり遂げた爽やかさに満ちている。

問六 文章冒頭の~~~~線部「ながいつながりだった」から、文章終盤

の~~~~線部「おもえば長いような、また短いようなつながりだった」への変化はどういうことを表しているか。その説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ははも私も苦痛に感じていた「ままはは」と「ままつ子」という関係から解放され、二人が親子としてすごしたつながりがこれからも続くことを私は肯定的に受け入れているということ。
- イ ははの死によって、ははも私も「ままはは」と「ままつ子」という関係からすでに抜け出していたことに気づき、ははと私が親子でなくなったことを惜しむ気持ちが私に生まれたということ。

ウ ままははの髪の毛にままははの幻影を見るほど「ままつ子」

の立場に縛られていた私が、赤い針さしを手放すことで古いつながりを断ち、玉子と新たな親子のつながりを築いていくということ。

- エ ははも私も「ままはは」「ままつ子」という立場に縛られていたために傷つけ合ってきたことを悔やみ、いつかははと死後の世界で出会ったのちには末永く穏やかな親子のつながりをつくろうと決意しているということ。

問七 本文中の表現について述べたものとして適切なものを次のア～

エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 針さしから針を抜く作業にとりかかっていたからの時間の流れは、弱い冬の日差しで洗濯物がいつまでも乾かない描写によって表されている。
- イ 日差しのもとで毛が動く様子を女性の姿に重ねた細やかな描写は、「毛のかがまりは伸びをした」と擬人法によってしめくくられている。
- ウ 会話文中における、すべての「——」は、頭の中に答えや考えはあるが、ことばにすることをためらっている様子が表れている。
- エ 針さしの赤は可憐さ、毛髪の黒は醜悪さ、カーディガンの白は純真さというように、色がそれぞれのシーンを象徴している。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

このように戦前を通じて、すこしずつ整列乗車や車内規範が現在のような形で **A** メイジされるようになってきた。ただし、それを説得するための論法や車内空間の位置付けは、現在とかなり異なっている。第二次世界大戦前後の時期、鉄道を利用する人びとの関係や空間はどのように位置付けられていたのかを、以下の1941年の論考からみてみよう。

車内は家庭の延長であり、社会の縮図であるともいわれる。皆で立派なものにしていたきたい。これではじめて大東亜共栄圏の確立に邁進しつづめる大国民としての価値があると存する次第である（大教社編輯部編『鉄道常識読本』大教社出版部、1941年…260頁。傍点引用者）。

この時期においても車内が「社会の縮図」とされていることがわかるが、その一方で、「社会」のイメージが現在とかなり異なっている。とくに注目すべきは、ここでの「社会」が「家庭の延長」と重ね合わされているところだろう。「家庭の延長」としての車内（≠社会の縮図）という考え方は、現在とは真逆のものだとさえいえる。

たとえば、2008年から2009年に展開され、話題になった東京メトロのマナーポスターに「家でやろう。」というシリーズがある（\*1 図版3 家以外の場所が挙げられることもある）。「家ではないのだから、車内で **B** ケシヨウはしないようにしよう」とか、「家では

ないのだから、車内で寝そべるのはやめよう」といったことを訴えるポスターである。このように現代社会では「車内は **X**」、こういうことはやめましょう」というメッセージが規範を説得するための話法として用いられている。

しかし、20世紀前半の日本社会においては「車内は **Y**」、こういうことはやめましょう」とまったく逆の説得の仕方が定着していた。1921年の鉄道省が募集した鉄道標語の入選作品にも、「**a** 客車内はわが家族 **b** ゆずりあい、**b** 客車内は我客間 **c** きれいにし、**c** 客車内は我家庭 行儀よく」というものがある。その後も、1936年の大久保寅一『安全への道 万人必携』（鉄道青年会出版部、1936年…71頁）において、「車室は一時にせよ共同の住居なれば、自分の家を綺麗にすると同じ気持ちで、常に清潔に保つ心得ありたきこと」と述べられている。

① 「家としての車内」が説得力のある論法として期待されたのは、身内に近い、自分にとって関係する人であれば気を遣って行儀良く対応するだろうと——実態はどうあれ——考えられていたためだろう。行為の順序、相互の位置、ふるまいやよそおいなどが体系立てられた「礼儀作法」が生じる伝統的な「家」の関係性を持ちこむことで、車内空間の秩序維持をはかっているわけである。逆にいえば、当時の人々は、その礼儀作法の外側にいる人びとをあまり気にしない傾向があると考えられていたことになる。戦前の公共交通においても「公德心」ということばがよく使われたものの、そこでの「公」は「家」の延長線上にある「道徳」において秩序維持されるようなものとして語られている。

一方、現代の「家ではない車内（家でやろう）」という論法は、む

しる家庭は② 気のおけない関係であり、多少の失礼があってもかまわない。① 空間であることが前提とされている。そして、その外側にある車内空間は、尊重し、遠慮しなければならない他者がいる② 空間になる。

ここには、戦前から現代にかけて、期待される家庭像が、伝統的な「家」という関係性から近代的な「家庭」という関係性に変化し、それにもない車内空間の秩序維持のありかたも変容していることがみてとれる。

武家、上層の農家、商家などで意識されていた「家」は、家名・家産・家業を継承する、家長を中心とした経営共同体と考えることができる。家長にしたがい、みんなで働く集団といえはいいだろうか。明治期になると、このような家制度は、近代以降、<sup>C</sup> 戸籍法の「戸主」を中心とするものとして強化され、親や祖先への服従が重視されるようになる（本多真隆『「家庭」の誕生』ちくま新書、2023年…66―70頁）。

明治期には、近代家族につながる「家庭」の理念も生まれていたが、「戦前において『家族』という言葉は、家制度的なニュアンスも色濃く含まれていた」（本多真隆『「家庭」の誕生』…76頁）。しかも、戦時中になると、戦前において「家庭」が「家」と対立する意味をもっていたことが忘れられ、とりわけ保守系の論調においては『「家庭」』は、『「家」』のなかにとりこまれていた（本多真隆『「家庭」の誕生』…137頁）。したがって、1941年の「家庭の延長としての車内」は、「家」的な家族像を指していると考えたほうが自然だろう。だとすれば、江戸時代の作法・儀礼がそうであったように、「家のように」は、車内にいる人びとを――上下関係や社会的面子の力学がはたらく――ある種の利害関係者とみなして、ふるまいやたすまいを整えることが期待さ

れていることになる。

一方、戦後の高度成長期を通して、夫婦と子どもを中心とした性別役割分業により運営される近代家族が「家庭」と表現され、主流となつていった。このとき家族は、夫婦や子どもの情愛を核にした閉鎖的関係、すなわちその外側と分離された③ 空間になる。とりわけ趣味や生活を重視することが、マイホーム主義や〈私生活〉志向とよばれ、〈公〉志向に優越するとされた（本多真隆『「家庭」の誕生』…206頁）。このような「パブリックとプライベート」を区別した語り方、および後者の重視によって、③ 車内空間は外部化されることになる。そして、車内空間は、「家」の延長ではなく、「家庭」から分離した領域④ 空間へ変化していく。その結果、車内空間を「家庭の延長」で包み込もうという方針は通用しにくくなる。それとは別様の仕方では、⑤ 空間として秩序化しなくてはならなくなるだろう。詳細は次章以降で扱うが、「家でやろう」という現代的論法は、私的空間と公的空間の分離、およびその緊張と緩和の使い分けが前提となつて以降、通用するようになったものといえる。

\*<sup>2</sup> 永井荷風が描いた路面電車の時代には、多様な職業の人々が乗車していた。実際、1920年の全<sup>D</sup> シュウギョウ者のうち、いわゆる「サラリーマン」を含む「新中間層」の割合は全国で約4%しかない。東京だけでみても12・86%にすぎない（日本リサーチ総合研究所編『生活水準の歴史的分析』総合研究開発機構、1988年）。もちろん戦前においても、現在みることができるとような通勤・通学客は増えており、ラッシュアワーは発生していた。しかし、乗客のさらに多くが、近代家族を構成する戦後的な「サラリーマン」や現代的な「オフィスワーカー」になっていくのは、戦後以降になるだろう。規範を説得する対

象の社会的属性が変化していけば、説得の仕方も変わる。こうして20世紀前半から後半にかけて、鉄道の規範を説得するとき前提となる「公と私」の関係や空間の感覚——「縮図としての社会」が変化していくことになる。

(田中大介『電車で怒られた！「社会の縮図」としての鉄道マナー史』による)

〈注〉

\*1 図版は設問の関係上省略している。

\*2 永井荷風：一八七九年～一九五九年。日本の小説家。

問一 〰線部A「メイジ」B「ケシヨウ」C「戸籍」D「シユウギヨウ」について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなでそれぞれ答えなさい。

問二 文中の空欄X、Yに入る言葉として、最も適切な組み合わせを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X家のようなものなのだから Y家のようなものなのだから  
イ X家のようなものなのだから Y家ではないのだから  
ウ X家ではないのだから Y家のようなものなのだから  
エ X家ではないのだから Y家ではないのだから

問三 〰線部a、b、cから、20世紀前半の日本社会における「家」がどのような場であったとわかるか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる語句を、本文から八字以上十字以内で抜き出さない。

しなくてはならない場。

問四 〰線部①『家としての車内』が説得力のある論法として期待された」とあるが、それは当時の人々にどのような傾向があったからか。その傾向を表している慣用句として最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 旅の恥はかきすて イ 袖振り合うも他生の縁  
ウ 縁の下の力持ち エ 長いものには巻かれる  
オ 人の振り見て我が振り直せ

問五 〰線部②「気のおけない」の言い換えとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心を許せない イ 遠慮のない  
ウ 配慮できない エ 相手を気にしない

問六 空欄 1 5 に「私的」「公的」をあてはめた組み合わせとして、最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア	1 私的	2 公的	3 公的	4 公的	5 私的
イ	1 私的	2 公的	3 私的	4 公的	5 公的
ウ	1 公的	2 私的	3 公的	4 私的	5 公的
エ	1 公的	2 私的	3 私的	4 私的	5 私的

問七 20世紀前半から後半にかけての変化を次のように表にまとめた。表中の空欄AからHにあてはまる言葉を〈語群〉から選び、それぞれ記号で答えなさい。

20世紀後半	20世紀前半	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Eの関係が期待される場所</li> <li>・礼儀作法がF場所</li> <li>・気をG場所</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aの関係が期待される場所</li> <li>・礼儀作法がB場所</li> <li>・気をC場所</li> </ul>	【家】
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の乗客に配慮するべき場所</li> <li>心が必要な場所</li> <li>家のHにあるので、「公德」が必要な場所</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の乗客に配慮するべき場所</li> <li>心が必要な場所</li> <li>家のDにあるので、「公德」が必要な場所</li> </ul>	【車内】

〈語群〉  
 ア 主従    イ 対等  
 オ 延長上    カ 範囲外  
 キ つかう    ク つかわない  
 ウ 必要な    エ 必要ない

問八 線部③「車内空間は外部化される」とあるが、その理由を五十文字以上六十文字以内で説明しなさい。

問九 線部「説得するための論法や車内空間の位置づけは、現在とかなり異なっている」とあるが、その変容についての説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 20世紀を通じて、「車内空間」は、他の乗客に配慮するべき場所という認識は変わらないが、「家」の延長上にある場所か、「家」と切り離された場所かという点に関して認識が変わったため、礼儀正しくする理由が変化した。

イ 20世紀の前半と後半とでは、社会状況が変化し、「サラリーマン」の割合が増加した。そのため、「車内空間」は仕事上の利害関係者がいるかもしれない空間と認識されるようになったため、礼儀正しく振る舞う必要が新たに生じた。

ウ 20世紀後半にかけて通勤・通学客が増加し、「車内空間」は乗客にとって知り合いと過ごす場所となった。知り合い同士が快適に過ごすためには他の乗客からの配慮が必要となるので、礼儀正しさが求められる理由が変化した。

エ 20世紀前半は、他者がある種の利害関係者とみなす傾向があり、それは「家」でも「車内空間」でも同様であった。20世紀後半は他者を利害関係のない者とみなすようになり、「車内空間」では他者に無関心をよそおうという礼儀が新たに生じた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

\*1 備前岡山 \*2 表具師幸吉といふもの、一鳩をとり入て、

其身の軽重、羽翼の長短を計り、我身のおもさを

かけくらべて、自羽翼を製し、\*3 機を設けて、  
比較して、製造し

胸前にて\*4 操り打て、① 飛行す。地より直にあがること  
からへるを操り、羽はたいて 場がる

あたはず。屋上より\*5 はうちていづ。  
がでまなひ。羽はたいて飛び出す。

ある夜郊外をかけり廻りて、一所a 野宴するを下し視て、  
飛び回つて ある場所で宴会をしているのを見下ろして、

もししれる人にやとb 近よりて見んとするに、地に近づけば  
知人ではないだろうか、と近寄つてみようとする。

風力よわくなりて、思はず落たりければ、その男女おどろき  
思いがけず落つてしまったので

さげびて c 逃はしりける。あとに酒肴さはに残りたるを、  
たぐさんじ

幸吉あくまで飲ひひしてまた飛さらんとするに、地よりは  
思つ存分 飛び去つてしたが、

たちあがりがたき A ゆゑ、羽翼をおさめて ② 歩いて帰りける。

後に此事あらはれ、\*6 ③ 市尹の \*7 庁によび出され、人の  
露見し、

せぬ事をするは、なぐさみと B いへども一罪なりとて、  
気晴らしになるような楽しみ

両翼を d とりあげ、その住る巷を追放せられて、他の巷に  
市街

うつしかへられける。一時の笑柄のみなりしかど、  
単なるひとときのお笑いへまであつたが

珍らしき事なればしるす。\*8 寛政の前のことなり。  
(昔茶山『筆のすさび』による)

〈注〉

\*1 備前：旧国名。現在の岡山県の東南部。

\*2 表具師：裂地や紙などを糊で張り合わせて、掛軸・巻物  
・額・屏風・衝立・襖・障子などを仕立てる職人。

\*3 機：細工を施した仕掛け。糸やぜんまい、水力などを用  
いたという。

\*4 操り打て：バタバタと鳥のように羽ばたかせた様子。

\*5 はうちていづ：はばたいて飛び出した。

\*6 市尹：町奉行。現代で言う裁判官の職務にもあたる。

\*7 庁：官公庁。

\*8 寛政：一七八九年から一八〇一年まで。江戸時代。

問一 線部A「ゆゑ」、B「いへども」の読みをすべてひらがな（現代仮名遣い）で書きなさい。

問二 線部aとdの動作の主語（主体）として最も適切なものを次のア～エから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。同じ記号を複数回用いてもよい。

ア 幸吉 イ 一鳩 ウ 男女 エ 市尹

問三 線部①「飛行す」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一鳩という特別大きな鳥を捕らえ、自分の体の重さを検討した上で可能だと判断し、一鳩につかまって飛んだということ。
- イ 羽に怪我をした鳩を捕らえ、体のサイズや重さを測り、人工の羽を作って飛ばしてあげたということ。
- ウ 捕らえた鳩と自分の身体の重さやサイズを比較検討し、羽とからくりによって自ら宙を飛んだということ。
- エ 複数の鳩を捕らえ、重さやサイズを計測、比較し、からくりで動く空飛ぶ鳩を作り、飛ばしたということ。

問四 線部②「歩して帰りける」とあるが、なぜか。次の空欄X、Yに当てはまる内容を考え、それぞれ八字以上十字以内で記述しなさい。

飛ぶ時には **X** 必要があるが、この時は **Y** ため、飛ぶことができなかったから。

問五 線部③「市尹」の会話文は、どこからどこまでか。本文中から探し、はじめと終わりの五字を抜き出して答えなさい。なお抜き出しの際にふりがなを書く必要はありません。

問六 この文章をめぐって、安田さんと白島さんが会話をしている。白島さんの会話文の空欄Zに当てはまる言葉として、最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- 安田さん 「寛政の前」だって。実話ならば驚くべき内容だね。
- 白島さん 私は、この出来事に対し、当時の人がどのような見方考え方で捉えたかに関心があるよ。
- 安田さん 町奉行としては、このことを罪だと捉えたのかな。
- 白島さん 「他の巷にうつしかへられける」という記述を見ると、どうもそのようだ。でも「飛行」「人を驚かせたこと」「無断飲食」のどれか一つが対象なのか、あるいは複数にかかるか、この文章からだけでは分からないね。

安田さん さらに具体的に、本文の言葉に着目してみようよ。どのような見方や考え方が見てとれるかな。

白島さん ああ、**Z**が分かるよ。

安田さん こうして私達は、古文を読むことで、故事を知るとともに、当時を生きていた人と出会い、対話できるね。

**A** 「なぐさみ」「珍らしき」という言葉から、当時の人や書き

手が、人並み外れた幸吉の行動に好奇心を覚えていること

**I** 「笑柄わらわげ」という表現から、当時の人や書き手が、幸吉のよ  
うな特異な行動をとる人をさげすんでいること

**ウ** 「人のせぬ事をする」「追放」という言葉から、当時の人が、  
常識的な人間だけを認め、非凡を認めないこと

**E** 「おどろきさげびて」「さには残りたる」という表現から、  
当時の人が、想像を超える存在を恐れ、お供え物を捧げて敬っ  
ていたこと

問七 E    A <input type="text"/> <input type="text"/> F    B <input type="text"/> <input type="text"/> G    C <input type="text"/> <input type="text"/> H    D <input type="text"/> <input type="text"/>	問四 <input type="text"/> 問五 <input type="text"/> 問六 <input type="text"/>	問三 <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	問二 <input type="text"/>	問一 <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">二</span> C    A <input style="width: 30px; height: 60px;" type="text"/> <input style="width: 30px; height: 60px;" type="text"/> D    B <input style="width: 30px; height: 60px;" type="text"/> <input style="width: 30px; height: 60px;" type="text"/>	問四 <input type="text"/> 問五 <input type="text"/> 問六 <input type="text"/> 問七 <input type="text"/>	問三 Y    X <input style="width: 30px; height: 20px;" type="text"/> <input style="width: 30px; height: 20px;" type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	問二 <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	問一 <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">一</span> A <input type="text"/> B <input type="text"/> C <input type="text"/>
--	--	--	----------------------------	--	--	---	--	---

受験番号

問六 <input type="text"/>	問五 <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> ) <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	問四 Y    X <input style="width: 30px; height: 20px;" type="text"/> <input style="width: 30px; height: 20px;" type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	問三 <input type="text"/>	問二 a <input type="text"/> b <input type="text"/> c <input type="text"/> d <input type="text"/>	問一 <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">三</span> A <input style="width: 30px; height: 60px;" type="text"/> B <input style="width: 30px; height: 60px;" type="text"/>	問九 <input type="text"/>	問八 <table border="1" style="width: 100%; height: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> </table>																																																																		

一	
二	
三	

\*採点者使用欄(この欄には何も書かないこと)